

母の 718 ひろば

doshinsha / haha no hiroba

和歌山静子さんを偲んで／西巻茅子、浜田桂子 2
作家と画家がであうとき⑩／鈴木まもる 3
いま、ソウルで紙芝居の文化が広がる／蔡京希 4
『花見じゃそうべえ』刊行記念インタビュー／田島征彦 6
新刊紹介／石井睦美、山本悦子 7
イラスト／小池アミゴ



春よ、来い

森越智子

新春に能登半島を襲った大地震。住む場所も遊ぶ場所も突然奪われた子どもたちはどうしているのか、暖かい居場所と、つないでくれる手と、そしてそこに「本」はあるだろうかと気になった。

13年前の東日本大震災の時、子どもたちへ絵本を送る活動を2年ほど続けたことがあった。ライフラインの確保が最優先の中、避難所の片隅で新聞紙を折って遊ぶ子どもたちの姿に、子どもの心の支援には本が必要だと思ったからだ。

かつて町の3分の1を焼失した函館大火（1934年3月）の際、罹災した子どもたちの心を癒そうと全国の図書館から12万4千冊もの児童書が届けられた。函館市立図書館（当時）の初代館長、岡田健蔵の呼びかけに応えたものだった。

岡田健蔵は大工の長男として函館に生まれた。尋常小学校を中退後、雑貨商で丁稚奉公し、独立後、国産原料を使った西洋式蠟燭の製造業に乗り出す。しかし原料の調合開発に必要な文献は容易に見つからなかった。産業の発展にとっていかに文献資料が重要なかを痛感した岡田は、図書館の設立を決意する。私財を投げ打って郷土資料を収集し、献身的な努力と情熱で1909年（明治42年）に開館した私立函館図書館には「あらゆる人に利用を」の理念のもとに児童室も開設された。児童室は連日、絵本を楽しむ子どもたちで溢れたという。絵本を届けることはそうした先人の想いを引き継ぐことでもあった。

東日本大震災の翌月立ち上げたプロジェクトの呼びかけに2万冊以上の本が各地から集まった。うず高く積みあがった段ボールのひと箱ひと箱に、それぞれの人と本とが過ごした時間がある。

「息子達の小さい時に読んだ絵本です。息子達は大きくなり、会話することもなくなりましたが、被災地へ絵本を送ろうと思った時、幼かった遠い日の事を親子で話し合う時間が持てました。息子達は1冊1冊の本を覚えていました」

繰り返し読んだ本の記憶は、豊かな子ども時代の記憶だ。その記憶が長い人生を生きていく土台になるのだと思う。

さて、蠟燭製造から始まった図書館の物語は、追い求めれば道はどこかへ繋がることを教えてくれる。そんな人が作る歴史を追いかけて書いてみたい。雪解けが始まる能登に確かな春が来ることを願いながら。さあ春よ、来い。

（もりこしともこ／作家）

和歌山静子さんを偲んで

静子さんのあの太くて優しくて隙のない線について

西巻茅子

命に向きあい続けた静子さん

浜田桂子

「90歳まで私は仕事をする」と言っていた静子さんが、83歳で亡くなってしまったのは少し早かった。ベッドの側で心臓発作で倒れていたというから、彼女としては「あっ、またころんだ」と思ったのかも知れない。彼女は家の中で何度もころんで肋骨を折ったりしていたから。手術をしたり何日も寝込んだりして、家族の手を煩わすことなくあっさりと逝ってしまったのは彼女らしい。

静子さんは20代の中頃から寺村輝夫さんの「王さまシリーズ」に挿絵を描き、以来60年近くたくさんの子どもの本に絵を描き、50作もの紙芝居の仕事をしてきたのだから、もう充分に働いたでしょう。

私が彼女に初めて会ったのは、40代になってからで、私たちは同じように1人で子育てをしながら、子どもの本に絵を描いてきた。彼女の周りには友人が多く、私もすぐに彼等と仲良しになった。皆で葉山の海で泳いだり、スキーに行ったり、一緒にご飯を食べたりと私たちは子連れで遊ぶ友人が必要だったのだ。私たちはたくさん話をしたが、仕事の話はあまりしなかった。出来上がった本は見せてもらっていたが、私は「いい絵だなあ」とか「かなわないなあ」と思うことが多かった。

彼女のあの太くて優しくて力強い線は油絵の筆で描いていると言っていた。私は和歌山静子のあの絵は和歌山静子の生き方そのものだという事に最近気づいた。彼女の嘘のない真っ直ぐな、そして優しい生き方があの太い線を描かせている。何事も勘で受け止め勘で発信する彼女の勘の良さがあのゆるぎない画面構成を形づくっている。彼女の生き方そのもので彼女の絵が出来上がっている。子どもたちは彼女の心からの発信を心で受け止めることができる。彼女の絵を子どもたちが大好きなのは当たり前である。私は友人として、絵描きの正しい姿を彼女の内に見ることができて幸せであった。

(にしまき かやこ/絵本作家)



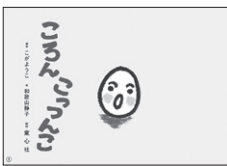
紙芝居『ねねのしるちゃん』
1983年
堀尾青史/脚本



おかさんとみる性の本
『ぼくのはなし』
1992年



日・中・韓平和絵本
『くつがいく』
2013年



紙芝居『ころんこっつんこ』
2018年
こがようこ/脚本
第57回高橋五山賞受賞作



性からだの絵本
『おとなになるっていうこと』
2022年
遠見才希子/作

「絵が描けるって、私たちすごく幸せなのよ」
静子さんは話の締めくくりによく言った。創作について、社会の不条理について、鋭い直感から発する言葉に時に戸惑いながらも、いつも私は励まされる思いがあった。

静子さんとはどれだけ行動を共にしただろう。2004年出版の『世界中のこどもたちが103』は、イラク戦争反対の意思表示のために絵本作家103名で作った絵本だ。実行委員会を立ち上げ、2人でトークイベントも引き受けた。

次のステップとして同じ実行委員であった田島征三さんが「東アジアの人たちと連帯して平和絵本を作ろう」と提案する。「そんな事できるはずがない」と私は消極的だったが、静子さんは「中国の友人に伝える」と発破をかけた。それで田畑精一さんを迎え、4人の連名で呼びかけの手紙を中国と韓国の作家に送った。

2007年に日・中・韓の作家12名と編集者が南京に集うことができたのは、静子さんの尽力が大きい。直接会い、アイディアを語り、激論を交わし、涙し、呑み、歌った数日間、国を超えて信頼を育む宝物のような時間だった。

絵本作りは誰もが苦勞した。とりわけ静子さんは自ら「加害」に取り組んだために難しかったと思う。粘り強く試作を繰り返し、シンボルとして「日本軍の靴」を発想する。初めてスケッチを見たとき、私は今までに無い絵本になると確信した。太い輪郭線の単純化されたフォルム。色彩は赤と黒の2色の指定。オリジナルの揺るぎない表現手法で、重いテーマを未来につなぐ展開にした。『くつがいく』の誕生だ。

静子さんが戦争を憎むのは理屈ではなく、命が粗末に抹殺される実感からだった。静子さんには弟がいた。戦時中食料が乏しく、干してあった豆を食べてしまったことから消化不良を起こし亡くなった。「弟の絵本を作るの。そうでないと、弟が生まれた意味がないものね」

急逝は、やはり残念でならない。

(はまだけいこ/絵本作家)

作家と画家が であうとき 14

『はしれ ディーゼル きかんしゃデーデ』



すとうあさえ・文／鈴木まもる・絵
2013年11月刊行

すとうあさえ様

鈴木まもる

拝復

「こちらこそ、『デーデ』の絵を描かせていただき、ちゃんとお礼を言っていないような気がします。改めて描かせていただきありがとうございます。ごさいます。

確かに最初、編集の横山さんからお電話いただいた時に「あまり電車を擬人化した絵は描きたくない」と言ったと思います。それは巷によくあるような、ライトを目、バンパーを口にして、変に弱虫になったりするような車の絵本が好きではなかったからです。本来、人が暮らしていく中で必要があり誕生したのが乗り物です。子どもさんたちは本能的に人の暮らしを生きるというところを感じるから乗り物絵本が好きなので、変な作り話は不要だと思うからです。

そこで送られてきた『デーデ』のお話を読みました。

前述のような乗り物と人との関係でいえば、『デーデ』のお話は震災にあわれた人たちの暮らしにすごく必要とされた乗り物のお話だと感じ、とても心動かされました。それから三人で会ったのですよね。

すとうさんは三人で会った時のこと、おぼえていないのですか？ 渋谷の天井の高い店で、ずいぶんお客さんが混んでいる中で話しましたよ。

そして擬人化の度合いの話になって、ぼくはデーデは鉄人28号と正太郎君の関係（この漫画、若い方は御存知ないかな？）的擬人化なんだと思う、というような話をしました。そして頼もしい「鉄人28号」的な絵本が描けると思ったのです。すとうさんが、ぼくが断ると思ったのは、きつとぼくの頭の中で、いろいろな絵が浮かんできて、アブセントマインド状態だったからではないでしょうか。ごめんなさい。

あとは楽しく絵が描けました。

小さい読者のお子さんが親しみを込めて「デーデの絵本」と呼んでくれるのを聞き、人と乗り物のこういう擬人化は良い形なのだと思います。

すとうさん、編集の横山さん、ありがとうございます。 (すずまもる／絵本作家)

去る二〇二三年十二月二日、韓国ソウルにある高麗大学にて韓国日語教育学会第四十四回国際学術大会が開催されました。今回の主題は「シティズンシップ教育としての日本語教育」です。

シティズンシップ教育とは、市民教育とも呼ばれ、他者と協力しながら、社会の一員として主体的に課題に取り組み姿勢を身につける教育のことです。わたしは紙芝居文化の教育的な側面はこれに相通じるものがあると考えていて、日本語教育に携わっている多くの研究者に、日本の紙芝居文化の素晴らしさを知ってもらいたいと思ったのです。そこで、学会に「紙芝居文化の会」と「紙芝居サミット」のメンバーを招待し、日本の紙芝居のことを発表してもらうことにしました。

学会の当日の開会式では、韓国日語教育学会と紙芝居文化の会・紙芝居サミットの交流・協力協定締結式が行われました。

いま、ソウルで 紙芝居の 文化が広がる



交流・協力協定締結式

蔡京希 (チエ・キョンヒ)

培花女子大学名誉教授、韓国日語教育学会会長歴任、
韓国紙芝居文化研究会代表

た。その後、テーマごとに各メンバーから発表がありました。

紙芝居文化の会の酒井京子さんからは、「紙芝居のカー紙芝居の理論と歴史・世界への広がり」と題し、紙芝居の二つの特性（紙芝居が観客のところへ出て行って広がること、画面への集中と「ミニ二ケーション」等について）「たべられたやまんば」『おとつさん』の実演を交えて、紙芝居の理論について発表がありました。

「紙芝居の歴史」を報告したのは永瀬比奈さんです。一九三〇年代の始まりから第二次世界大戦中の日本における戦争へ向かわせようとした国策紙芝居、戦後の教育紙芝居から今日に至る文化としての紙芝居について、歴史的変遷を知ることができました。また、野坂悦子さんからは、紙芝居文化が世界に広がり、現在は紙芝居文化の会会員が五十六か国にわたっていることの報告がありました。

紙芝居サミットからは、中平順子さん

による「地域に広がる紙芝居」の発表です。共感の中で社会性を育む紙芝居の力とともに、さいたま市の行政と関わりを深めながら、地域の伝説を掘り起こした紙芝居制作を埼玉大学の授業の中で行った活動と、育ちあいの場について報告がありました。そして、その紙芝居「見沼のふえ」を久保塚かおりさんが実演し、自身の子どもへの教育に生かされていると発表がありました。埼玉大学有機農業研究会の押井那歩さん、尾形友聡さんからは「紙芝居と地域の自然と社会の持続性」をテーマに、有機農業が目指す世界と紙芝居との深い関わり事例発表がありました。命響きあう世界の探求としての活動に、紙芝居の創作や実演は意欲的に取り組むにふさわしいと捉えている若い世代の取り組みです。

学会初の紙芝居セッション発表は、会場の参加者に深く感動を与えました。創

作教育への試みや、翻訳出版への興味を示す人、作品創作に関心をもった人もいました。クラスで実践するためには、まず指導者講習会を設けようという声もありました。

文法訳読法、オーディオリンガル法、コミュニケーションアプローチへと、時代とともに変化してきた言語教授法は、もはや異文化理解としての外国語教育の重要性、更に異なる他者との共生のためのシティズンシップ育成（教育）が語られるようになってきています。人と人を心でつなぎ豊かな広がりを生み出す出会いの文化、紙芝居こそ今の言語教育にふさわしいものではないでしょうか。

わたしは二〇〇四年三月、友人の紹介で中平順子さんと出会った時から大学の日本語教育に紙芝居を取り入れることを図り、〇四年と一九年に日本国際交流基金ソウル文化センターの助成事業の一環で、紙芝居の舞台公演を韓国の大学生に紹介する企画を実践し、優れた紙芝居文化への理解を深め、広がってきました。培花女子大学日本語科は、〇四年度から毎年紙芝居を卒業作品発表会に取り入れています。紙芝居は、日本語能力の向上はもちろんですけど、共感の喜びが実感できる驚くべきものであります。



紙芝居『見沼のふえ』の実演



感動が広がった紙芝居セッション発表

学会に参加された、韓国在住の紙芝居作家、イ・スジンさんからコメントをいただきました！

二十年以上の関わりをもってきた紙芝居関係者の皆様との交流を大切に思い、今年の一月二十日、ささやかな発起人会を開き「韓国紙芝居文化研究会」を立ち上げることにしました。微力ながら、わたしの人生を紙芝居を通して韓国と日本の交流と友好の架け橋の役に捧げたいと思っています。これからの活動がどんなふうに展開されるか今のところ明確では

ありませんが、日本語教育の立場から紙芝居が良いものであることは確かです。更に紙芝居の実演を披露する中で、出会いと共感の喜び、を味わうことができる素晴らしい教育の場になることは間違いないと確信しています。

文化とは、心をつなぐ力。向き合っていて関わってお互いを育てあう紙芝居文化の広がりを大いに期待しています。

学会の当日は、冬にしては暖かい日でした。「学術ゼミ」と聞いて少し緊張しながら高麗大学の講義室に向かいました。

紙芝居の発表は、中平順子さんの『じゅっくわのくろね』の実演からはじまりました。これはわたしからはじめて作った韓国の昔話の紙芝居作品です。わたしも図書館や学校などで子どもたちに演じたことはありましたが、演じてもらうことははじめてです。ワクワク、ドキドキしました。中平さんの実演はとてもやさしくてあたたかで、その情熱に感動しました。

観ている他の観客の反応も気に

なります。猫に小豆を食べさせる、金が出てくるところで笑い声が聞こえてきました。ほっとしました。この作品を作ったよかったです。この作品を作ったよかったです。なと改めて思いましたし、もっといろいろなお話を作ってみたいと思いました。

近年、韓国も少子化の問題が深刻で、ひとりっ子が増えています（わたしにもひとりっ子の娘がいます）。友だちとの共感の経験が必要とされる時代だと思えます。そうした共感の輪を大事にする紙芝居の文化が、韓国でも広がっていき、より多くの子どもたちに楽しんでほしいなと思いました。

『花見じゃそうべえ』

刊行記念インタビュー

田島征彦

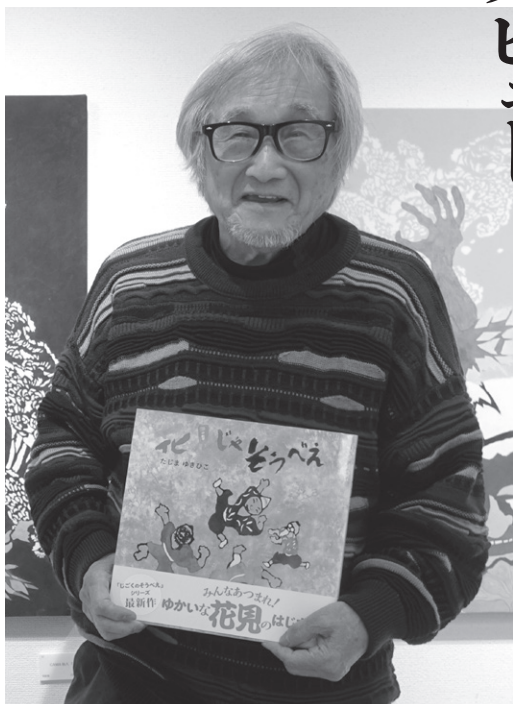
(たじま・ゆきひこ)

『じごくのそうべえ』より四十六年、シリーズ七作目となる

『花見じゃそうべえ』が刊行となりました。

シリーズに込めた思いや、

新作についてお話を伺いました。



——『花見じゃそうべえ』で、「そうべえ」シリーズが七作目になりました。

『じごくのそうべえ』が十万部を突破したときに、全国の障害のある子どもたちに絵本をプレゼントしようと思うて童心社に相談したら、絵本の買い取り額が何十万円もかかるという。それだったら、「そうべえ」の絵本をもう一冊作って、その資金にしようと考えたのです。そうして「そうべえ」はシリーズになりました。

絵本を読んだ子どもたちからのファンレターで「次はどこへ行くの?」と聞かれるので、そうべえたちは、宇宙に行ったり、竜宮城に行ったりし

ているのです。

——「そうべえ」シリーズを描く際にどんなことを大事にしていますか。

「そうべえ」シリーズは、大らかな世界を描いています。

主人公のそうべえたちは、いい歳をして、大きな失敗ばかりしている大人たちです。そんな彼らを許さないのでなくて、包み込んであげたいという思いがあります。世の中がどんどん窮屈になっているから、せめて絵本の世界では大活躍して、みんなで面白く過ごしていいんじゃない

かなと。

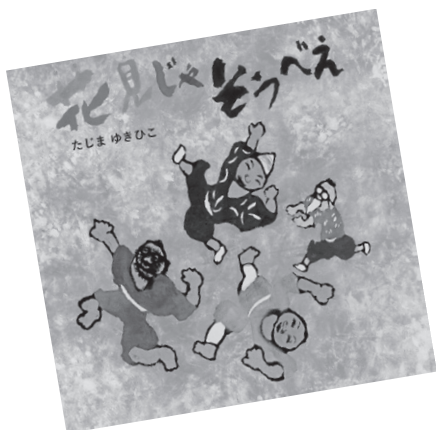
——新作はどういうきっかけで?

二〇二三年の十一月に足を骨折しました。慣れない入院生活のなか、何かと不自由でストレスがたまるので、絵本でも考えてみようと思ったのです。

そうべえの仲間には歯抜き師の「しかい」がいます。江戸時代の歯医者というのは、街頭に人を集めて、歯を抜いたり、歯みがき粉を売ったりしていたのです。米朝師匠がそうした話を、よく落語の枕に使っていたのを思い出して、そこから発想を膨らませていきました。

絵本をやりだすと、生活が絵本に取りつかれてしまいます。寝ても覚めても、そうべえたちは、どんな花見をしているのだろうと考えてしまい、それで頭がいっぱい。絵本つくりと一緒に生活しているような感じがするね。歳とったからかな。

(まとめ・編集部)



花見じゃそうべえ

たじまゆきひこ/作
定価1,650円
(本体1,500円+税10%)

BOOK

たんぼぼになりたいのはだれ？
うさぎ？ ちょうちょ？ それともこのこ？
そう思いながら、ページをひらくと――。

たんぼぼになりたいのは、たんぼぼのわたげだった。わたげは笑いながらとんでいく。たんぼぼの花だったときの幸福な記憶を胸に、またあの幸福に出会うのを楽しみに、そのことが約束されていることがうれしくて。

自分ではどうにもならないことを受け入れて、自分が自分になることに、もうこれ以上のしあわせはないと、このちっぽけなたんぼぼのわたげは知っている。そのふわふわのからだごと感じている。

だから、たんぼぼのわたげは笑っている。こどももうさぎもちょうちょも笑っている。どのページもどのページも笑顔がいっぱい。明るいひかりがページからあふれだして、わたしたちのこころまで明るく照らしだしてくるようだ。

読みながら笑顔になっている自分に気づく。

自分を肯定することの大切さとか、自分が自分であることの大事さとか、おとなはずそんなことを考えてしまうけれど、おとなだって、ただうれしくなりたくて読めばいい。こどもたちがそう読むように。

(いしい むつみ／児童文学作家)



たんぼぼになりたいくて
内田麟太郎／文 南塚直子／絵
定価1,430円
(本体1,300円＋税10%)

しあわせの約束

石井睦美

命を吹きこむ魔術師



ふでばこのくにの冒険
ほくを取りもどすために
村上しいこ／作 岡本順／絵
定価1,430円
(本体1,300円＋税10%)

山本悦子

冷蔵庫、テレビ、ランドセル、ピーカー、雑巾などなど、これまで村上しいこが命を吹きこんできた物を数えあげたらきりが無い。村上しいこの手にかかれれば、どんな物でも魔術のように生き生きと動き出す。今回登場するのは、文房具たち。修人のふでばこのくにの住人たちだ。中でも変わり種なのが、ボーイと名付けられた修人そっくりのフィギュア。3Dプリンターで作ったらしい。ボーイには、修人の気持ちに手が取るようにわかる。ふでばこのくにの住人たちからも、クラスのみんなかからも「いじわる」で「乱暴」と思われている修人。でも、ボーイはそうではないことを、ちゃんと知っている。修人は、辛い気持ちを抱えているのだ。それは「大人の事情」で、修人にはどうすることもできない。ふでばこのくにのルールでは、「もち主の生活に首をつっこまない」「運命はしずかに見まもる」ことになっている。しかし、ボーイやふでばこのくにの住人たちは、修人の苦しみを解決するために冒険に出る。首もつっこむし、運命にも逆らう！

わたしも小学生の頃、「ふでばこのくに」を持っていた。お気に入りの消しゴムは折らないように大切に使い、バラの匂いのするえんぴつは一度も削らなかつた。もし、わたしの知らないところで、彼らがわたしの幸せのために冒険していてくれたとしたら……。想像するだけでワクワクしてくる。

(やまもと えつこ／児童文学作家)

BOOK

3月の新刊図書！

お金の使い方で未来を変えよう！

- ①買い物の基本を知ろう
- ②商品とお店を上手に選ばよう
- ③お金についてくわしく知ろう
- ④エシカルな消費をしよう
- ⑤お金のトラブルをなくそう

松葉口玲子／監修 303BOOKS／編

定価各3520円(本体3200円+税10%)

商品を選び、物を大切に消費で、世界の未来を変えよう！商品の選び方から、支払いのさまざまな方法、地球や人にやさしい消費、そしてお金のトラブル防止まで。小学校5年家庭科「消費生活・環境」に対応。



くらべてわかる！こんちゅう図鑑

- ①つかまえ方とかい方
- ②からだのつくり
- ③おとなになるまで
- ④食べ物とすみか

須田研司／監修

グループ・コロンプス／編

定価各2420円(本体2200円+税10%)

めくってくらべると、虫ごとのちがいがよくわかる！大きな写真や明解なイラストで、つかまえ方とかい方、からだのつくり、育ち方、食べ物とすみかという視点で、代表的な昆虫をくらべます。



イラスト／小池アミコ



ももんちゃん あそぼう

とんとん ももんちゃん

とよたかずひこ／さく・え

定価990円(本体900円+税10%)



ももんちゃんが泣いているうさぎさんの背中を、とんとんしてあげます。「いっしょにここにいてあげるね」。すると、ふたさんたちも……。

あとがき

2024年3月15日発行(毎月刊)

母のひろば 第718号

定価50円(年600円/送料とも)

発行所: 童心の会

〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6

株式会社童心社内

電話: 03(5976)4181

03(5976)4402(編集)

編集発行人: 橋口英二郎

童心社のホームページ:

<https://www.doshinsha.co.jp/>

デザイン: 坂本梓 ロゴ: 谷口広樹

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌(無料)と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。購読料金は1年分600円(送料とも)。



●ロシアがウクライナへの軍事侵攻を始めて2年が過ぎ、長期化する戦闘で多くの命が今も失われ、ウクライナから避難した2000人超が日本で暮らしています。子どもたちの今日が、そして明日もそんな日々が続くことを誰も望んではいないのに。一日も早く平和が来い……思いをこめて紙芝居講習会では必ず『のぼら』(原作・小川未明)を演じます。 **H**

●気温の上がった今月上旬、秩父の低山で今年最初の山歩きをしてみました。山麓の足もとにはフクジュソウにセツブンソウと、スプリング・エフェラルが顔を出し、中腹ではロウバイの黄色が青々とした空に向かって伸びていました。今年は例年以上に花粉症がひどく、くしゃみも涙も止まりませんが、もう春はすぐそこ、自然と気持ち華やきます。 **N**